

文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究 (シ05)

目的 東京文化財研究所で行われている調査研究に関する情報及び国内外の文化財に関するさまざまな情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、それらの情報の効果的な公開の手法に関する調査研究を行う。

- 成果**
1. デジタル画像の形成方法の研究開発
 - ア) 運営費交付金や外部資金による他プロジェクトの一環として、東京文化財研究所内外において、准胝観音像（東京国立博物館所蔵）、扇面法華経（四天王寺所蔵）など多数の文化財の光学的調査を実施、一部は成果報告書を刊行した。また、調査研究の成果を論文等で発表した。
 - イ) 『春日権現験記巻九・巻十 光学調査報告書』を2021（令和3）年3月16日付で刊行した。
 - ウ) ガラス乾板に記録された色情報に関する調査を沖縄県立博物館・美術館等で実施した。
 2. 文化財情報に関する調査研究
 - ア) 文化財情報の適切な発信のための情報の扱い、特に過去に収集された情報の再活用に関する調査研究を進め、学会や論文を通じて発表した。
 - イ) 展示収蔵施設の学芸員、自治体の担当者などの文化財の実務家を対象に、文化財の記録作成についての1回のセミナー、2回のハンズオン・セミナーを開催した。
 3. 東京文化財研究所が行う調査研究成果の発信
 - ア) 研究情報の発信の一環としてウェブサイトを活用した。令和2年度は、3件のウェブデータベースの新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善、ウェブサイトの適宜更新を実施した。また、メールマガジン、ソーシャルメディアを通じて、国内外の文化財関係者に対し活動報告や催事などウェブサイトの更新情報、及び新型コロナウイルス感染症拡大に伴う国際機関を中心とした取組みに関する情報を発信した。
 - イ) 2020（令和2）年9月30日付で『東京文化財研究所年報2019』を刊行した。編集にあたっては、各部・センターの年報部会員の協力を得た。
 - ウ) 研究成果紹介のためのパネル展示をエントランスロビーで行った。令和2年度は文化遺産国際協力センターによる「カンボジア・アンコール・タネイ寺院遺跡東門の修復」を展示した。
 4. 調査研究及び研究成果発信のための文化財情報基盤の整備・充実

ネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を実施、国立文化財機構内他施設の担当者との情報交換を行いセキュリティ水準の維持・向上に努めた。また、職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に、「情報システム部会研修会」を1回開催した。なお、所内の情報基盤整備及びセキュリティ関連業務は、各部・センターの情報システム部会員と連携して実施している。

ウェブサイトアクセスランキング

1	ガラス乾板データベース	6	『美術画報』掲載図版データベース
2	書画家人名データベース	7	黒田清輝日記
3	東京文化財研究所トップ	8	年紀資料集成
4	『日本美術年鑑』所載物故者記事	9	写真原板データベース（4×5カラー）
5	『日本美術年鑑』所載美術界年史彙報	10	『保存科学』

(令和2年度 上位10位まで)

ウェブサイトの主な更新履歴

(定期刊行物の公開、活動報告、公募情報を除く)

年月日	更新内容	関係部局
20.4.24	新型コロナウイルス感染症予防にかかる美術館博物館等の作品消毒の窓口	保存科学研究センター
20.5.1	新型コロナウイルスと無形文化遺産	無形文化遺産部
20.5.21	文化財修復の現状と諸問題に関する研究会報告書 公開	保存科学研究センター
20.6.3	ご来所の皆様へ(手指消毒や検温、マスク着用をお願い)	研究支援推進部
20.6.5	資料閲覧室の再開	文化財情報資料部
20.6.16	台湾における近代化遺産活用の最前線 公開	保存科学研究センター
20.6.25	資料閲覧室予約方法の変更	文化財情報資料部
20.7.13	『船大工那須清一と長良川の鶺舟をつくる』公開	無形文化遺産部
20.7.14	展覧会「日本美術の記録と評価—調査ノートにみる美術史研究のあゆみ—」開催	文化財情報資料部
20.7.15	デジタルブック版『未来につなぐ人類の技 19 コンクリート造建造物の保存と修復』公開	保存科学研究センター
20.7.21	エントランスロビー展示「カンボジア・アンコール・タネイ寺院遺跡東門の修復」	文化遺産国際協力センター
20.8.6	文化財の記録作成とデータベース化に関するハンズオン・セミナー 「文化財写真入門 —文化財の記録としての写真撮影実践講座」開催	文化財情報資料部
20.8.12	『かりやど民俗誌』公開	無形文化遺産部
20.9.1	ゲッティ・リサーチ・ポータルでの江戸時代版本(織田文庫) 公開	文化財情報資料部
20.9.4	第54回オープンレクチャー 開催	文化財情報資料部
20.9.30	デジタルブック版『未来につなぐ人類の技』1～12 公開	保存科学研究センター
20.10.12	【シリーズ】無形文化遺産と新型コロナウイルス フォーラム1「伝統芸能と新型コロナウイルス」動画公開	無形文化遺産部
20.10.15	研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」開催	文化遺産国際協力センター
20.10.30	「箕のページ」公開	無形文化遺産部
20.11.11	本研究所における新型コロナウイルス感染者の発生	研究支援推進部
20.11.30	第15回無形民俗文化財研究協議会の動画視聴ページのご案内	無形文化遺産部
20.12.28	第15回無形民俗文化財研究協議会の動画視聴ページ公開	無形文化遺産部
21.1.13	資料閲覧室開室日の変更	文化財情報資料部
21.1.15	「売立目録作品情報」公開	文化財情報資料部
21.1.26	『日本の芸能を支える技VI 三味線 東京和楽器』刊行	無形文化遺産部
21.2.1	「斎藤たま 民俗調査カード集成」公開	無形文化遺産部

- 論文・二神葉子：「尾高鮮之助撮影バーミヤーン西大仏の写真による三次元空間画像の作成」『保存科学』60 pp.131-144 21.3 ほかに4件
- 発表・小山田智寛ほか：「デジタルコンテンツと継続性：明治大正期書画家番付データベースを例に」デジタルアーカイブ学会第4回研究大会スピンオフ研究発表会 20.7.5 ほかに5件
- 刊行物・『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 春日権現験記絵 巻九・巻十 光学調査報告書』 21.3

研究組織 ○二神葉子、塩谷純、江村知子、小林公治、小林達朗、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、城野誠治、中村亮介、谷口每子、安岡みのり、磯山浩美、酒井かれん(以上、文化財情報資料部)

広報委員・情報システム部会：早川泰弘(保存科学研究センター長) 各部署情報システム部会員：安達佳弘、鈴木道夫(以上、研究支援推進部)、橘川英規(文化財情報資料部)、石村智(無形文化遺産部)、倉島玲央(保存科学研究センター)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター) 広報委員・年報部会：山梨絵美子(副所長) 各部署年報部会員：井上裕介、三本松俊徳(以上、研究支援推進部)、小林公治(文化財情報資料部)、前原恵美(無形文化遺産部)、犬塚将英(保存科学研究センター)、安倍雅史(文化遺産国際協力センター)

専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充(シ06)

目的 当研究所が行う文化財の調査・研究の成果を集約するとともに、専門性の高い資料や情報を蓄積・整理する。あわせてデータベースの継続的拡充を行い、資料閲覧室を窓口にして文化財に関する総合的レファレンスを充実させる。

成果 1. 全所的な文化財情報の発信：通常は年4回アーカイブズワーキンググループ協議会を開催してきたが、第1四半期は新型コロナウイルス感染症の影響により、メールによる意見集約・情報共有を行い、第2四半期以降は3回（2020（令和2）年7月16日、12月3日、3月16日）、アーカイブの拡充及び積極的に情報発信を行うための協議を行った。また円滑な研究業務推進と資料の保存活用を両立させるため、図書や画像資料等の利用規定についても協議を行った。

2. 売立目録デジタルアーカイブの改良と報告書の作成：令和元年度より資料閲覧室にて公開しているデジタルアーカイブの校正作業を進め、昨年度開催した研究会の内容を拡充した報告書を刊行した。また売立目録に記載されたテキスト情報に基づくデータベースのインターネット公開を2021（令和3）年1月より開始した。

3. ゲッティ研究所が構築している語彙データベースとの連携のため、当研究所が蓄積してきた日本の美術家1,758名分の人名情報をゲッティ研究所に提供した。

4. 通常は資料閲覧室を週に3回公開してきたが、新型コロナウイルス感染症の影響により2020（令和2）年2月28日から資料閲覧室は閉室し、その後事前予約制を導入し6月10日より週に2回の公開を再開した。さらに2021（令和3）年1月の緊急事態宣言発出により、週1回の開室に変更した。開室日・利用者数は減少したが、デジタル資料のオープンアクセス化の増加や、インターネット公開のデータベースの拡充、遠隔複写サービスなどを積極的に行い、研究支援を実践した。



報告書『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望』

閲覧室事業の運営

1. 年度内資料受け入れ数
和漢書 1,853件、洋書 777件、展覧会図録・報告書等 1,355件、雑誌 2,720件（合計 6,705件）
2. 年度内閲覧室利用状況
公開日総数 125日・年間利用者合計 988人

刊行物・『東京文化財研究所 研究報告書 売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望—売立目録の新たな活用を目指して—』東京文化財研究所 21.3

研究組織 ○江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、小林達朗、小野真由美、城野誠治、寺崎直子、尾野田純衣、大前美由希、田村彩子、阿部朋絵、鈴木良太（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）、永崎研宣、片山まび、川瀬由照（以上、客員研究員）

令和2年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）(シ08)

目的 文化財情報資料部の研究成果の一部を外部講師を交えて広く一般に公開する。

- 成果
1. 2020（令和2）年10月30日、専門家はもとより広く一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。研究所内部より2名の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。
 - ・塩谷純（文化財情報資料部長）「近代日本画の“新古典主義”—小林古径の作品を中心に—」
 - ・二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）「タイに輸出された日本の漆工品—王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆扉を中心に—」
 2. 外部からの聴講者は新型コロナウイルス感染症予防に鑑み、抽選制とし、34人の参加を得た。参加者からのアンケート結果では、26名の回答者のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ92.3%の回答を得ることができた。



オープンレクチャーの様子

研究組織 ○小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、中村亮介、野城今日子（以上、文化財情報資料部）

無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化 (△03)

- 目 的** 無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。無形文化遺産部所蔵のアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。
- 成 果**
1. 映像資料については、再生不可となることが危惧されるHi 8、DVCを中心に媒体変換を行った。
 2. 音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960年代に放送された純邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認した。また民謡のオープンリールテープ録音についてもデジタル化を実施し、収録内容の確認を行った。
 3. カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。
 4. 無形文化遺産関連の音声映像資料11点（作成DVD10点・作成BD1点）を所蔵資料として新たに登録した。
- 報 告**・飯島満：「資料紹介：新内節四曲一昭和三十二年度文化財保護委員会作成記録より一」『無形文化遺産研究報告』15 pp.120-136 21.3
- ・星野厚子：「資料紹介：東京文化財研究所所蔵フランス・パテ社製SPレコード一長唄『寒行雪の姿見』『筑摩川』を中心に一」『無形文化遺産研究報告』15 pp.138-150 21.3
- 研究組織** ○石村智、牛村仁美、金昭賢、中田翔子（以上、無形文化遺産部）、飯島満（特任研究員）、星野厚子、大西秀紀、宮澤京子（以上、客員研究員）

文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信 (コ01)

目的 海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。国際情勢に鑑みつつ優先度の高い国の文化遺産保護関連の法令について条文を和訳し、法令集として刊行する。また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果をインターネットなど多様な媒体を通じて国内外に情報発信する。

成果

1. 文化遺産保護に関する情報収集のための国際会議やシンポジウム等については、世界遺産委員会等のように新型コロナウイルス感染症拡大の影響により開催されなかった、あるいは第94回国際文化財保存修復研究センター理事会のようにオンライン開催に変更された。オンライン開催については、これに参加して情報収集を行った。
2. 文化遺産保護関連の法令の収集・分析及び翻訳作業を実施し、英国政府担当者に依頼した英国の文化財保護制度の概説を含む『各国の文化財保護法令シリーズ[25]英国(グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)』として刊行した。
3. 例年行っている「世界遺産研究協議会」については開催せず、次年度と併せた2カ年での実施として、今年度は概念及び論点の整理を行って報告書の形で刊行した。

刊行物・『各国の文化財保護法令シリーズ [25] 英国 (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)』東京文化財研究所 21.3

- ・『世界遺産研究協議会「整備」をどう説明するか(第1部)』東京文化財研究所 21.3
- ・『Attributes -a way of understanding OUV-』Japan Center for International Cooperation in Conservation, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 21.3

研究組織 ○西和彦、境野飛鳥、藤澤綾乃、石田智香子(以上、文化遺産国際協力センター)、二神葉子(文化財情報資料部)、石村智(無形文化遺産部)

プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

文化財情報資料部

「文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー」 シリーズ「デジタル画像の圧縮～画像の基本から動画像まで～」(④シ05の一部として実施)

文字や写真による文化財や収蔵品の記録作成（ドキュメンテーション）は、調査研究・保存活用のための基礎的なデータを取得する活動である。文化財の形と色の記録は、今日ではデジタル媒体で行われることが多いが、デジタル画像の構造や画像圧縮の原理などの基礎についての情報は、十分に提供されているとは言いがたい。そこで、デジタル画像の圧縮に関する標記のセミナーを開催した。セミナーは3回を予定しており、今回は第1回目として「デジタル画像の基礎」を開催した。

日 時：2020（令和2）年12月23日（水） 13:00～17:30

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

参加者：35名（所外参加者）

プログラム：今泉祥子（千葉大学）「デジタル画像の基礎 講演1」

城野誠治（東京文化財研究所）「デジタル画像の基礎 講演2」

文化財情報資料部

ハンズオンセミナー 「文化財写真入門—文化財の記録としての写真撮影実践講座」(④シ05の一部として実施)

本セミナーは、「文化財の記録作成とデータベース化に関するセミナー」の実習形式（ハンズオン）版として、写真撮影に特化したものである。令和2年度には下記の2回を開催した。

第1回

日 時：2020（令和2）年8月24日（月） 10:00～17:00

会 場：上原美術館

主 催：東京文化財研究所

後 援：静岡県博物館協会

協 力：上原美術館

参加者：11名

プログラム：田島整（上原美術館）「寺院調査の事例紹介」

城野誠治（東京文化財研究所）「文化財写真で大切なこと」

城野誠治（同）「撮影実習」

第2回（宮城県博物館等連絡協議会令和2年度第2回研修会としても開催）

日 時：2021（令和3）年3月12日（金） 10:00～17:00

開 場：東北歴史博物館

主 催：東京文化財研究所、宮城県博物館等連絡協議会、東北歴史博物館

参加者：14名

プログラム：二神葉子（東京文化財研究所）「文化財の記録作成の意義」

秋山純子（同）「文化財防災センターについて」

城野誠治（同）「文化財写真撮影の基本」

城野誠治（同）「撮影実習」

第14回無形文化遺産部公開学術講座（M01の一部として実施）

無形文化遺産部では、無形文化財ならびに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、毎年、公開学術講座を行っている。今年は、「日本の伝統的な管楽器と竹材」を2021（令和3）年3月20日に開催した。本講座は、日本の伝統的な管楽器（箏篥、龍笛、笙、能管、篠笛、尺八等）の材料である竹材が抱える課題を、竹の生産・販売者、楽器製作者、演奏家の共通課題として整理することを目的とし、分野を横断した研究者による成果報告と、演奏家による試演を行った。

日 時：2021（令和3）年3月20日（木） 13：00～17：00

会 場：東京文化財研究所 セミナー室、地下ロビー

主 催：東京文化財研究所

参加者：本講座は新型コロナウイルス感染症拡大を鑑みて無観客収録とした。今後、記録映像を当研究所ホームページより配信、別途報告書を刊行・同ホームページ上で公開予定。

内 容：第一部

【研究成果報告】

小峰幸夫（東京文化財研究所）「竹材の虫害についての報告」

犬塚将英（東京文化財研究所）「煤竹と白竹の基本的な物性の違い」

倉島玲央（東京文化財研究所）「白竹の一次加工についての報告」

前原恵美（東京文化財研究所）「様々な竹材、代替材の使用感についての報告」

亀川徹（東京藝術大学）「様々な竹材、代替材の音響測定についての報告」

【総括】「竹で拓がる、竹で深まる」

司会：前原恵美（東京文化財研究所）

亀川徹（東京藝術大学）

小峰幸夫（東京文化財研究所）

倉島玲央（東京文化財研究所）



第二部 実演—伝統的な竹の管楽器いろいろ

中村仁美 箏篥（煤竹古管／煤竹新管）：《萬歳楽》、《五常楽》、《双調調子》より

瀨瀬拓也 龍笛（煤竹／谷竹／花梨／プラスチック管）：典型的なフレーズ、《春鶯囀》より（笙との合奏）

八槻純子 笙（煤竹の新管／プラスチック管）：立ち上がり、《春鶯囀》より（龍笛との合奏）

松田弘之 能管（煤竹古管／煤竹新管）：《平調音取》、《千歳之舞》より

善養寺恵介 尺八（白竹／メタル尺八）：《無住心曲》

福原徹 篠笛（白竹／煤竹）：長唄《明の鐘》

能管（プラスチック管／煤竹）：長唄《小鍛冶》のセリより

「保存と活用のための展示環境」に関する研究会－照明と色・見えの関係－ (②ホ02の一部として実施)

保存環境研究室ではこれまで展示照明に焦点をあて、文化財の保存を考えた照明のあり方に関する研究会を開催してきた。今回の研究会では少し視点を変え、これまであまり文化財の分野では触れられてこなかった、保存とは少し違う観点の「照明」について知ることを目的に本研究会を開催した。

日 時：2021 (令和3) 年3月4日 (木) 13:30～16:50

会 場：東京文化財研究所 セミナー室

主 催：東京文化財研究所、文化財活用センター

参加者：27名

講 演：佐野千絵 (東京文化財研究所名誉研究員)

「ごあいさつ・導入」

溝上陽子 (千葉大学 大学院工学研究院)

「照明と色・質感の見え」

吉澤望 (東京理科大学 理工学部 建築学科)

「輝度から予測される絵画の見え」

山内泰樹 (山形大学大学院 理工学研究科)

「リモート・ミュージアムでの色と見え ～色の見えの個人差、高画質化へのチャレンジ～」

文化財に用いられている鉛の腐食と空気環境(②ホ03の一部として実施)

保存科学研究センターの研究プロジェクトである「文化財の材質・構造・状態調査に関する研究」では、様々な科学的分析手法によって文化財の材質・構造を調査し、劣化状態を含む文化財の物理的・化学的な特徴を明らかにするための研究を行っている。本研究会では、文化財における鉛の使用例、近年全国で顕在化している鉛の腐食に関する問題、空気環境と鉛の腐食に関する調査及び修復の事例報告等を通じて、情報の共有とディスカッションを行った。

日 時：2020 (令和2) 年12月14日 (月) 13:30～16:30

会 場：東京文化財研究所 地下会議室

参加者：20名

講 演：犬塚将英 (東京文化財研究所)

「趣旨説明」

長谷川祥子 (静嘉堂文庫美術館)

「鉛を使用した作品の紹介－静嘉堂文庫美術館の所蔵品を中心に」

伊東哲夫 (文化庁)

「文化財に用いられている金属の腐食に関する最近の状況」

早川泰弘 (東京文化財研究所)

「鉛とその腐食に関する材料工学的な概論」

古田嶋智子 (国立アイヌ民族博物館)

「空気環境と鉛の腐食に関する調査の事例報告」

室瀬祐 (目白漆芸文化財研究所)

「鉛の腐食と修復に関する事例報告」

総合討論

世界遺産研究協議会 (④コ01の一部として実施)

「文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信」プロジェクトで行っている諸研究のうち、世界遺産に関する制度と最新の動向についての情報を提供するための研究協議会については、我が国の文化財保護における「整備」を対外的にどのように説明するかというテーマに関して開催する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の状況を考慮して開催せず、次年度と併せて2カ年の予定とし、今年度は必要となる概念や論点の整理について専門家に寄稿を依頼して、報告書として刊行した。

研究会「東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理」(③コ02の一部として実施)

平成28年度から東南アジアの木造建築をテーマに連続して開催してきた研究会の最終回として、東南アジアにおいて木造建築遺産の保存修理に用いられている手法の特徴やその背景にある考え方などを明らかにすることを目的に開催した。当初は2020(令和2)年3月の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う渡航制限により延期を余儀なくされ、11月にオンラインでの開催となった。研究会には当地で文化遺産保護に携わる実務家の参加を得て、実際に行われている木造建築保存の様々な方法や技術に関する講演を行ってもらい、パネルディスカッションでは東南アジア各国だけでなく日本の木造建築保存の考え方や双方での方法論の違いを比較分析する観点からの議論を行った。

日 時：2020(令和2)年11月21日(土) 14:00～17:10

会 場：オンライン(Zoom) / 東京文化財研究所 地下会議室

使用言語：日本語・英語(逐次通訳 山内奈美子、金出ミチル)

参加者：56名(最大同時視聴者数46名)

プログラム：趣旨説明 金井健(東京文化財研究所)

講 演 ポントーン・ヒエンケオ(タイ王国文化省芸術局建造物課)

「タイにおける木造建築遺産の保存修理」

セントン・ルーヤン(ルアンパバーン世界遺産事務所)

「ラオスにおける木造建築遺産の保存修理」

モンティラー・ウナークン(ユネスコバンコク事務所)

「国際的視点から見た東南アジア木造建築遺産保存修理の現状と課題」

パネルディスカッション

モデレーター 友田正彦(東京文化財研究所)

パネラー 中内康雄(公益財団法人文化財建造物保存技術協会)、ポントーン・ヒエンケオ、セントン・ルーヤン、モンティラー・ウナークン

刊行物：『東南アジアにおける木造建築遺産の保存修理 研究会記録 / Conservation of Wooden Architectural Heritage in Southeast Asia Proceedings』東京文化財研究所 213

総合研究会(④シ)

総合研究会は、各研究部・センターの研究員がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。令和2年度は下記のスケジュールで開催した。

- ・第1回 2020(令和2)年9月1日(火)
発表者：秋山純子(保存科学研究センター)「九州国立博物館における環境保全について」
- ・第2回 2020(令和2)年11月10日(火)
発表者：間舎裕生(文化遺産国際協力センター)「イスラエル・パレスチナの考古学と文化遺産」
- ・第3回 2020(令和2)年12月1日(火)
発表者：塩谷純・小山田智寛(文化財情報資料部)「黒田清輝と久米桂一郎—日本洋画界を支えた交流」
- ・第4回 2021(令和3)年1月12日(火)
発表者：今石みぎわ(無形文化遺産部)「民俗技術における素材と加工技術—箕を中心に」

文化財情報資料部

文化財情報資料部研究会(④シ)

文化財情報資料部では、ほぼ月に1回のペースで美術史研究者を中心とする研究会を開催して、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに討議によって充実を図っている。なお令和2年度は、緊急事態宣言下の年度当初を除き9回を開催、2021(令和3)年に入ってからオンラインも活用した。2020(令和2)年度の開催内容は下記の通り。(肩書は発表時のもの)

- 6月23日(火) 田中潤(文化財情報資料部客員研究員)「近代の大礼と有職故実」
- 7月28日(火) 小野真由美(文化財情報資料部主任研究員)「江戸初期狩野派史料の研究—探幽縮図を中心に—」
- 8月25日(火) 山梨絵美子(副所長)「ゲッティ研究所が所蔵する矢代幸雄と画商ジョセフ・デュヴィーンの往復書簡」
- 10月 8日(火) 丸川雄三(文化財情報資料部客員研究員)「近代美術研究における関係資料の発信と活用」
- 11月24日(火) 武田恵理(東洋美術学校非常勤講師)「初期洋風画と幕末洋風画、形を変えた継承—日本における油彩技術の変遷と歴史的評価の検証—」
コメンテーター：坂本満(美術史家)、佐藤則武(日光社寺文化財保存会)
- 12月21日(月) 野城今日子(文化財情報資料部アソシエイトフェロー)「屋外彫刻を中心とした「文化財」ならざるモノの保存状況についての報告と検討—シンポジウム開催を見据えて—」
コメンテーター：田中修二(大分大学)、篠原聡(東海大学)
- 1月28日(木) 大西純子(神奈川大学国際日本学部非常勤講師)「上野直昭資料について—日本美術史との関係を中心として—」
田代裕一朗(五島美術館学芸員)「上野直昭資料から発見された高裕燮直筆原稿について」
- 2月25日(木) 米沢玲(文化財情報資料部研究員)「片野四郎旧蔵の羅漢図について—図様と表現の考察—」
安永拓世(文化財情報資料部主任研究員)「片野四郎旧蔵「羅漢図」の近代における一理解」
- 3月25日(木) 山梨絵美子(副所長)「白馬会の遺産としての『日本美術年鑑』編纂事業」

文化財情報資料部

東文研 総合検索(④シ05の一部として実施)

東京文化財研究所が所蔵する図書や雑誌、展覧会カタログ、画像等の資料、東京文化財研究所の定期刊行物、国内外の美術関係文献等について、メタデータを横断的に検索することが可能なウェブデータベースで、デジタルデータを公開する「研究資料データベース」も含め、29件のデータベース、約168万件のデータを検索対象とする。検索画面は日英両言語に対応している。当研究所の定期刊行物については、本文のPDFデータを閲覧することも可能である。なお、日本国外における美術展覧会・映画祭開催情報、及び日本国外で出版された書籍情報に関しては、英国セインズベリー日本藝術研究所が採録した情報を受け入れている。

www.tobunken.go.jp/archives/

研究資料データベース(④シ05の一部として実施)

東京文化財研究所が作成、収集した研究資料の画像データやテキストデータを検索・閲覧することができるウェブデータベース。現在、20件のデータベース、10万件余りのデータを公開しており、すべてのデータベースを横断的に検索可能で、一部を除き「東文研 総合検索」からの横断検索にも対応している。
www.tobunken.go.jp/materials/

無形文化遺産部

インターネット公開「国の選定保存技術 邦楽器原系製造の記録〈短編〉」(①ム01の一部として実施)

国の選定保存技術である「邦楽器原系製造」は、邦楽器の絹糸弦に用いられる特殊な原糸を繰糸する技術である。無形文化遺産部では、この技術を保持団体・木之本町邦楽器原系製造保存会(会長・佃三恵子)の協力を得て2020(令和2)年7月に記録撮影、〈長編〉と〈短編〉に編集し、〈短編〉を2021(令和3)年2月より公開している。



木之本町邦楽器原系製造保存会の繰糸技術

無形文化遺産部

「斎藤たま 民俗調査カード集成」(①ム02の一部として実施)

民俗学者 斎藤たま氏(1936~2017)が作成した調査カードのアーカイブ。カードの内容は植物、動物、まじない、遊び、言葉などに関わる民俗事例を調査収集・整理したもので、総数約4.7万枚。2017(平成29)年に東文研に寄託された。カード内容の概要、キーワード、スキャン画像などが検索できるアーカイブを2021(令和3)年2月に開設。2021年3月末時点で約8,079件を公開、毎月更新予定。



斎藤たま民俗調査カード集成

無形文化遺産部

インターネット公開「箕のかたち 資料集成」(①ム02の一部として実施)

2020年(令和2)年12月~1月にかけて開催した「箕のかたち—自然と生きる日本のわざ」展にあわせて開設したサイト。民具の「箕」に関する映像等の収集・公開を目的とし、各地の箕に関する14件の映像を公開(2021(令和3)年3月末時点。うち1件は公開期間終了)。14件のうち7件は東文研で制作した映像、7件は既刊の映像で公開許可を得たもの。



箕のかたち 資料集成